

経済学の視点からとらえる教育

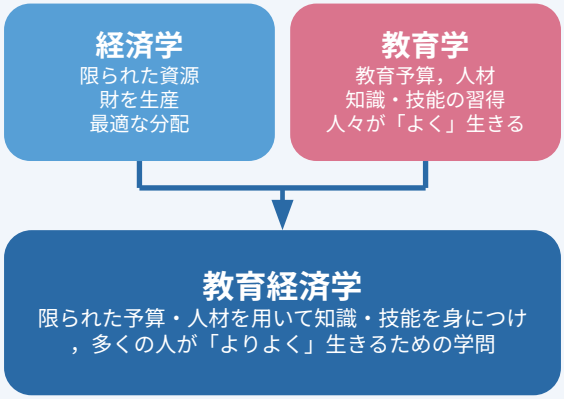
—教育経済学とはどのような研究領域か—

1.教育経済学とは

経済学の視点：限られた資源で財を生産し，最適に分配する

教育学の視点：教育者（資源）を使って知識や必要な技能（財）を身につけさせ，多くの人がよりよく生きるための学問

教育経済学：教育により必要な知識・技能を身につけさせ，人的資本を生み出す。その教育の経済的な役割を明らかにする学問



キーワード　**人的資本**

教育や訓練によって長い間かけて身につけた有用な知識や技能の蓄積のこと。教育で身につけた知識が多かったり，技能が高かったりすることは，その人に高い賃金をもたらすという点で資本である，と捉えることができる。

2.研究分野

■ クラスサイズ

学級規模縮小の効果：効果は存在するが小さく，大量の予算が必要なため費用対効果は高くない。学習効果はプラスだが費用が非常に大きい

利益が特に大きい生徒：社会経済的に恵まれない家庭，保護者の学歴が低い家庭，家庭環境が不安定，少数派集団，学業不振の生徒

学級規模の最適値は？

学級が小さすぎると？	学級を大きくすると？
子ども同士の学び合いが減る 同レベルの友人が少なくなる	最初は人数増加で学習効果が上がる 一定規模を超えると混雑の悪影響

キーワード　**教育生産関数**

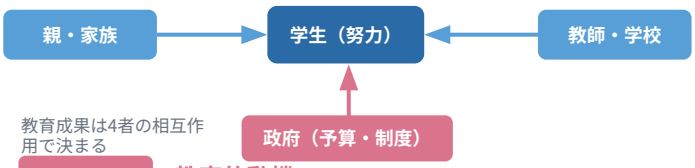
学校・家庭環境などが教育成果に与える影響を表す関数。学級規模はその一要素

■ 家庭（家族が教育に与える影響）

ゲーム理論の適用：教育における「家族（親）」の影響と，複数主体の関係性を解き明かす

情報提供の効果：補助金増額よりも，親へ学習サポート法を伝える情報提供（対面やSMS等）の方が家庭での関与を増やし，中退率減少・問題行動の改善に効果的

子育てスタイル：学歴社会で選ばれやすい権威型，親の教育水準が低い場合や低学年期の権威主義型，創造性や余暇を重視する許容型があり，社会の不平等度や親の説得力，経済的動機から合理的に選ばれる



教育成果は4者の相互作用で決まる

キーワード　**教育的動機**

政府が予算を増やしても親が手を抜く等の相殺が起きる。各主体の動機が鍵

■ 教育格差（社会経済的地位）

データ：ヨーロッパのEU-SILC（親の学歴，家庭の経済状況）とPISA（学力調査）。高校未修了率，留年率，学力，高等教育修了率に注目

わかったこと：子どもの学力や教育成果には家庭の社会経済的地位が関係し，将来の就職や所得にも影響しうる。家庭環境に左右されず誰もが平等に学べる環境づくりが重要

約6〜7% 高校未修了率：親が高学歴	**約33%** 高校未修了率：親が低学歴	**約5倍** 未修了率の差
7.1→15.5% 留年率：高学歴→低学歴の家庭	**86点差** PISA数学：SES上位25%と下位25%	**42〜43点差** 数学・読解：親が大卒か否か

キーワード　**社会経済的地位**

Socioeconomic Status（SES）。親の学歴・職業・家庭の経済状況などで表す

■ 非認知能力

非認知能力とは：記憶能力・判断力などの認知能力以外の，意欲・態度・粘り強さ・協調性・自己管理能力などの特性。学力だけでは説明できない個人の成長や社会的成果に関わる

問題点：複数の異なる特性を一括りにしており定義が曖昧になりがち。質問紙による測定では回答の偏りが生じうる。粘り強さや協調性の重視しすぎは同調圧力につながるおそれ

まとめ：学力だけでは測れない人間の成長を理解するうえで重要。一人ひとりの個性や個人差を重視する必要がある

認知能力（IQなど）	非認知能力
記憶能力・判断力・学力	意欲・態度・粘り強さ 協調性・自己管理能力

キーワード　**非認知能力**

non-cognitive skills。就職・所得・幸福度との関連が注目される

3.教育心理学と教育経済学を同時に学ぶ意義

① 教育心理学は能力の育ち方や個人の成長の違いを研究している。教育経済学では最適な資源の分配という視点から，教育が行われている場全体を見ることができる

② 経済学部ならではの，経済学という学問と教育のつながりがわかる

③ 1つの領域だけでは見切れないものを補完しあえる